

大震動鹿雞等多以群集、頃而彼黑雲亘西方雞一羽在其雲中、見人目、是希代未聞奇瑞也者、武衛令聞之給、則御湯殿下庭上、遙拜彼社方給、彌催御欽仰之誠云々、件時刻京鎌倉、共以雷鳴地震云云、〔宇野主水記〕二十二月○天正十三年四月、秀吉公今度地震ノ時、江州ニ御逗留、其後大坂へ御歸城、夫ニ付今度ノ地震ニテ、御城内少モ無恙御ヨロコビトテ、御門跡様、新門様、興門様、御禮ニ御出候、強飯二折、白鳥鮭廿疋、鯛廿枚、鯛一折、御樽十荷、新門様ヨリ唐縫ノ道服、興門様ヨリ御小袖袷、〔桃源遺事三〕一西山公大風大地震の時、日光山の役人某が許へ、御文を被遣、神廟の御安否を御尋被遊候、勿論東叡山へも、増上寺へも御人つかはされ、御佛殿御安否を御聞被成候、水戸の御廟瑞龍の御墓所は不及申事也、

〔地震懲毖之碑文〕諺に由斷大敵とは、深意のあることにて、假初におもふべからず、安政元寅年十一月の事なりき、朝五時頃、常に覺へぬ程の地震して、岸本の浦鹽のさし引十間餘の違あり、又手結の湊内も干揚りて鰻をうる夥し、同日兩度小震す、しかはあれどさはかり驚く人もあらざりしを、翌五日八ッ過大に震動すること三度、七時過大雷鳴の如き、どろ／＼響くとひとしく大地震す、こはいかにと衆人驚く程こそあれ、家藏高塚器物の崩れ破る音、さらにいふ許なし、逃んとすれども、目くるめきて自由ならず、ほう／＼家を出けるに、津波打來りて、當地は徳善町より北の田中、赤岡は西濱並松の本、吉原は庄屋の門までに及び、又川尻の波は、赤岡神輿休のほとりまで、にいたり古川堤、夜須堤も押切られて、夜須の町屋など過半流失す、かくて人々は、老を扶け幼を携へ泣叫びつゝ、王子、須留田、又は平井、大龍寺の山へと逃登りて命助かりぬ、此時國中○土佐の官舎民屋多く轉倒し、就中高智下町、幡多、中村ともに失火ありて、一圓焼亡し、凡て怪我横死何百人といふ事なし、幸甚なるかな、此地は神祇の加護によりて、一人の怪我もなく、彼山々に己家をかまへ、日を経るに隨ひて、震もいさゝか穩に成りしかば、惠ある大御代の恭を悦つ、皆己が家